

# 福島江川式建築を探る

～建築家・江川 三郎八～

その1

寄稿 齋藤 隆夫



江川三郎八

が加わったのを見つけた。何者なのか？に彼の壮絶な人生が見えてきた。会津藩士である父の江川宗之進廣伴は病死し、戊辰の役で会津白虎隊寄合組に属した兄を亡くす。そのうえ会津藩は遠く下北の地に斗南藩と改称移封されたため、江川母子も過酷な生活を強いられる。

廃藩置県に伴い会津に戻ると、母に先祖の汚名を雪ぐよう諭され、遠縁の山岸喜右衛門棟梁（国重文・会津さざえ堂建築棟梁の系譜）の下で堂宮大工となり、福島県雇（とい）から岡山県の高等

官まで立身出世を果たす。福島県では県会議事堂、郡役所、警察署、学校、寺社仏閣等広範な設計監督に携わり、さらに須賀川橋、藤橋、信夫橋など橋梁の設計までもこなす超人ぶり。明治35年に岡山県へ転任になり、武徳殿（現存）と記載されている。また、Wikipediaには現存の武徳殿として「福島市板倉神社武徳殿 福島県倉神社武徳殿」と記された図面に、津若松市芦ノ牧温泉に移築され、旅館「仙峡閣」として使用中とある。

江川は自伝『生ひ立ち』に無名なのかを知りたくなり、申し訳ない思いも重なる彼の追っかけとして使用中とある。そこで、本県に数少ない現存する江川式建築を確か掌と陸梁の仕口（傾き

地名から「信夫山武徳殿」と呼ぶことにする。信夫山武徳殿と板倉神社武徳殿は、江川三郎八研究会のFacebookに掲載されているそれぞれの写真から同一建物だと類推できるが、詳しくは後述する。なお江川が武徳殿設計したことは、福島県施設管理課が保管している「大日本武徳会福島支部」と記された図面に、同研究会の代表・難波好幸氏から教示があった江川式小屋組の特徴である

年（1938）に福島市上浜町に移転新築される。板倉神社脇の旧武徳殿建物は昭和16年（1941）4月に再度信夫山（林平蔵）が、引き受けられる下屋が付いており、上浜町武徳殿も同様で外観や16本の柱配列など多くの酷似点が見られる。上浜町武徳殿は会津武徳殿建築の4年後に完成しており、設計および工事工期を考慮すれば、会津武徳殿のデザインを踏襲したと見るのが自然な気がするが如何だろうか。なお、仙峡閣は、令和元年7月に文化審議会から文科相に対して国登録有形文化財にするよう答申された。次回は丹羽家御書屋はかについてご紹介する。

このほかに県内の武徳殿としては昭和9年（1934）7月に会津若松市鶴ヶ城趾内に建てられた武徳殿がある。

## 3つの「武徳殿」を追う

「福島県警察史」によれば、信夫山武徳殿は明治36年（1903）に武徳会福島支部により信夫山公園に建築され、明治43年（1910）10月に板倉神社脇の紅葉山公園（県庁東側）に移された。地元信夫山の住人である西坂茂氏の著書「復刻版信夫山」にも「明治三十二年、黒沼の上駒山に武徳殿造営、後県庁敷地に移る。」と記されている。その後、武徳殿が昭和13

「武徳殿」を著しているが、かめたくて仙峡閣に何っ福島を出て二十数年を経たのだが、これがどうにた大正13年の起稿でもしっくりこないため深追いしてみた。

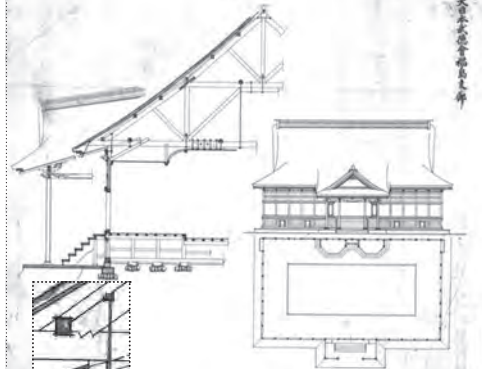
以下では江川設計の武徳殿を、当初建てられた

「福島県警察史」によれば、信夫山武徳殿は明治36年（1903）に武徳会福島支部により信夫山公園に建築され、明治43年（1910）10月に板倉神社脇の紅葉山公園（県庁東側）に移された。地元信夫山の住人である西坂茂氏の著書「復刻版信夫山」にも「明治三十二年、黒沼の上駒山に武徳殿造営、後県庁敷地に移る。」と記されている。その後、武徳殿が昭和13

「武徳殿」を著しているが、かめたくて仙峡閣に何っ福島を出て二十数年を経たのだが、これがどうにた大正13年の起稿でもしっくりこないため深追いしてみた。

以下では江川設計の武徳殿を、当初建てられた

「福島県警察史」によれば、信夫山武徳殿は明治36年（1903）に武徳会福島支部により信夫山公園に建築され、明治43年（1910）10月に板倉神社脇の紅葉山公園（県庁東側）に移された。地元信夫山の住人である西坂茂氏の著書「復刻版信夫山」にも「明治三十二年、黒沼の上駒山に武徳殿造営、後県庁敷地に移る。」と記されている。その後、武徳殿が昭和13



信夫山武徳殿（大日本武徳会福島支部武徳殿）の外観写真とその図面（左下は仕口拡大図）

「武徳殿」を著しているが、かめたくて仙峡閣に何っ福島を出て二十数年を経たのだが、これがどうにた大正13年の起稿でもしっくりこないため深追いしてみた。



（上から）板倉神社武徳殿、上浜町武徳殿、会津武徳殿